北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業／北海道里づくりアドバイザー情報誌

里づくり

第13号　２０１６年7月
編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課
〒060-8588　札幌市中央区北３条西６丁目
TEL　011-231-4111　/　FAX　011-232-4128

北海幹線用水路沿いに歩く参加者たち
写真提供：岩見沢市　高柳 広幹 アドバイザー

CONTENTS

地域づくりリレーインタビュー
先祖が残してくれたものを絶やしてはいけないという想い
郷里の味 なかむらえぷろん倶楽部　代表　伊藤　裕美子　さん

実践！地域づくり
東鷹栖食品加工販売協議会　会長　遠藤　純子　さん

北海道里づくりアドバイザーレポート／全国研修を受講して
岩見沢市　高柳　広幹　さん

BOOKS

―人に学び、地域に学び、今できることから始める―

美唄市　郷里（さと）の味　なかむらえぷろん倶楽部

なかむらえぷろん倶楽部の皆さん

1982年　「中村のとりめし」で地域を盛り上げようと農家女性達が美唄市内のイベントでとりめしを販売
1998年　郷里の味なかむらえぷろん倶楽部設立
2002年　北海道産業貢献賞（農業関係功労者）受賞
2004年　第２回「わが村は美しく－北海道」運動地域特産部門銀賞受賞

現在、会員数は、正会員８名、賛助会員１３名。

先祖が残してくれたものを絶やしてはいけないという想い

美唄市中村地区には、百年以上続く、伝統の郷土料理があります。「中村のとりめし」です。醤油味ベースの素朴などこか懐かしい味わいが、今も地域の農家女性達の手によって、しっかりと受け継がれています。

―「えぷろん倶楽部」設立のきっかけを教えてください。

美唄市中村地区は、明治二十七年に三重県生まれで当時二十三歳の中村豊治郎が美唄に入植したのが始まりです。

開拓が始まったばかりの北海道では、ほとんど作物がとれず、入植者達は食べ物が手に入りませんでした。

豊治郎は貧しい入植者達の健康状態を心配し、入植者に鶏を貸し出し、入植者達は鶏を育て、鶏卵を販売し収入を得、鶏卵や鶏肉から栄養を摂っていました。

「中村のとりめし」は、大正時代、稲作が軌道に乗り始めて収穫されるようになった貴重な「米」と栄養価の高い「鶏」を、当時、稀少であった醤油と砂糖で味付けし、お客様へ提供する、「おもてなし」の心があふれるふるまい料理でした。「鶏」は、精肉だけでなく、皮・内臓もすべて使い切ります。

八十年代、米の消費が落ち込み価格が低迷し、農業経営が厳しさを増す中で、付加価値を付けて中村のお米を食べてもらい、地域を盛り上げようと昭和五十七年の第一回美唄市農業振興祭で、とりめしの販売を始めました。

とりめしは、「懐かしい味」と評判を呼び、その後も「世界食の祭典」や地域の石狩川河川敷で行われた「百万凧祭り」など道内各地のイベントに出店するようになりました。

中村のとりめしの釜

そして、平成十年、農家女性達による「郷里（さと）の味　なかむらえぷろん倶楽部」を設立し、本格的なとりめしの製造販売に乗り出すことになりました。

製品化に当たっては、各家庭で代々受け継がれてきた味付けが異なるため、皆に愛される味にするのに苦労しました。

―とりめし製造の一日について教えてください。

調理は、田植時期、正月を除いて、毎日朝六時半から六名ほどで行っています。早いときには朝四時から作業したこともあります。

一日およそ八升（約八十食）、年間で百七十俵を炊き上げます。イベントなどで注文が多いときは、四升釜を三十回転させたこともありました。

「美唄発！アンテナショップPipa」国道１２号線沿

調理終了後は、宅配、伝票の整理を行い、作業が終わるのは、正午頃になります。

―今年で設立十八年ですが、活動を長く続ける秘訣は何ですか。

家族の理解・協力が重要だと思います。家事との両立は常に意識しており、家の仕事をおろそかにしない、きちんとこなすことで、家族も協力してくれています。

更に、地域の協力が大きいです。美唄市中村農協（現在はＪＡびばいと合併）には、調理の場所の提供と販路の拡大に協力していただきました。

また、利用組合や連合会からも調理器具を提供していただくなど、中村地区全体が一体となって協力してくれています。

「美唄発！アンテナショップPipa」　店内

とりめしは家庭でも作る料理ですが、中村地区では、行事、慶弔時に、釜で注文してくれるのでありがたいです。

倶楽部のメンバーは仲が良く、喧嘩をしたことがありません。作業が終わった後、みんなでお茶を飲みながら、おしゃべりするのが楽しみです。他愛もないことを笑って話せる雰囲気であることが大事だと思います。

とりめし弁当と炊き込みセット

また、年に一度、メンバーで行く研修旅行が楽しみで、活動の励みにしています。長く続けることはとても大切だと思います。設立当初の会長は、こんなに長く続くとは思っていなかったようです。

―後継者の育成についてはいかがですか。

なかなか思うように進んでいません。

今は、遠方の高校に通う子供の送り迎えが必要であることなどが、私たちの時代とは違うようで、昔と比べて子育ての期間が長いように思います。

―今後の活動と「中村のとりめし」にかける想いについて教えてください。

『遠くの方にも出来たてのおいしい「中村のとりめし」を食べてほしい。』という長年の願いは、「炊き込みセット」という新商品により叶えることができました。「中村産のななつぼし」と「とりめしの素」がセットになって、いつでもご家庭で炊きたてのとりめしが食べられます。

郷里の味なかむらえぷろん倶楽部は、再来年で二十周年を迎えます。具体的にはまだ決めていませんが、何か記念となる活動を行いたいと考えています。

また、将来的には、倶楽部を法人化したいと考えています。

「中村のとりめし」は、先祖が残してくれたものです。毎日口にしても飽きない、ずっと残していきたい味です。

先人の知恵と素朴な味を絶やしてはいけないという想いで今後も活動を続けていこうと思います。

「中村のとりめし」は、「美唄発！アンテナショップPipa」などでお求めいただけます。また、炊き込みセットは、「美唄ファンポータルサイトPipa」（http://www.pipaoi.jp）でもお求めいただけます。

■問い合わせ先「郷里の味　なかむらえぷろん倶楽部」
電話：0126-69-2562

実践！
地域づくり

旭川市東鷹栖地区

東鷹栖食品加工販売協議会

東鷹栖食品加販売協議会は、地域の小学校を再利用した食品加工施設「東鷹栖農村活性化センター野土花（のどか）」が建設されたことを機に、東鷹栖の６つの女性農業者グループが集まり、協議会が結成されました。

協議会では、各グループで製作した商品を統一ブランドとし、加工施設の名称からブランド名を「野土花」としました。

今回、お話しを伺った東鷹栖食品加工販売協議会の会長・遠藤純子さん（写真右）と、谷イチ子さん（写真左）

旭川市東鷹栖は、北海道のほぼ中央、上川盆地の旭川市北部にある、北海道内でも有数の田園地域です。

平成九年に廃校となった小学校建物の一部を活用し、平成十三年、食品加工室や農産加工室等の設備を備えた東鷹栖農村活性化センター「野土花（のどか）」が開設されました。

元々、自分の農場で採れた野菜などを加工し、家族だけで食していた加工品を多くの人たちに味わってもらいたい、と考えた東鷹栖の女性農業者たち六グループが集まり、東鷹栖食品加工販売協議会を設立しました。

協議会では、現在、なんばん味噌・大豆味噌をつくる「自然工房ななかまど」、米粉パン・自家製ベリージャムをつくる「華くらぶ」、しそ加工品・煮豆をつくる「美土里の会」、減農薬野菜から漬物をつくる「菜の花」、糀・味噌をつくる「かたくり会」、トマトジュースをつくる「トマトヴィーナス」「ルーラルガーデン」の七グループが活動しています。

メンバーの中には、複数のグループを掛け持ちする人もおり、活動メンバーはのべ三十三名で、東鷹栖農村活性化センター食品加工室を利用して加工品を製作し販売しています。

協議会では、各グループのつくる加工品を地域ブランドとして統一したいとの思いから、利用している農村活性化センターの名称である「野土花」を協議会での統一ブランド名として、現在、約三十種類の商品に付して販売しています。

グループはそれぞれで活動していますが、商品に付けるロゴ、メンバーが持つ名刺のデザインは統一するなどの工夫をし、どの加工品を手に取っても「東鷹栖の野土花」をＰＲできるようにしています。

野土花ブランドの加工品は、地域の飲食店や保育園、学校給食で、安全・安心の地域食材として利用されています。

加工品をつくる際は、ひとつの食品加工室を複数のグループが利用することから、加工品の衛生管理には、とても気を遣っています。

例えば、食品加工室を使用するのは、保健所からの助言により、一日一グループ一製品の加工をルールとし、グループ数も、今の七グループを保ち、増やさないようにしています。

また、保健所と密に連携を取ることを心掛け、二～三年に一度はメンバー全員を対象とした食品衛生の講習会を開いています。

特に忙しい時期などは衛生管理がおろそかにならないよう、常に気を引き締めています。

田植えや稲刈りの季節などの農作業繁忙期以外はほぼ毎日利用することになる食品加工室の利用希望日などをグループ間で調整するため、各グループの代表が集まる会議を月に一度開催しています。

会議の中では、食品加工室の利用希望日の調整のほか、グループ間で問題になっていることなどを話し合ったり、協議会全体としての活動内容についてなどを話し合います。

商品は、地元のＪＡたいせつ農産物直売所に卸しているほか、地域のイベントなどでも販売しています。

また、東鷹栖農民連盟定期総会での参加記念品として、野土花ブランドの詰め合わせを毎年発注いただくなど、東鷹栖ならではのお土産品、贈答品としても地域のみなさんに認識していただいています。

贈答品などは各グループが加工品を持ち寄って詰め合わせにしますが、野土花ブランドでロゴを統一しているため、統一感があり大変好評です。

最近では、新製品を期待する声もあり、甘酒など、今までは販売していなかった新しい分野の商品も考案中です。

また、東鷹栖の農作物をもっと地域で食べてほしいとの思いから、地場産の米粉や野菜を使用した料理教室を開催するなどの活動をしています。

地域の若いお母さんから、料理教室がきっかけで地域の農産物や野土花の加工品を使うようになった、との声をいただいたりすると、とても嬉しいです。

協議会の活動は今年で十六年目となりますが、初代の協議会会長は、こんなに長く活動が続くと思わなかったと言っていました。

メンバーの家業は農家ですが、農作業の合間に加工品づくりを行ってこられたのは、やはり、家族の暖かい見守り、協力があったからこそだと思います。

これからも、地域や家族に感謝しながら、東鷹栖の野土花ブランドを育てていきたいです。

グループは今の数から増やすことはできませんが、今後、メンバーの高齢化が進み、グループが減ってしまったときには、ぜひ、地域の若い女性たちが新しいグループとして参加し、また新しい野土花ブランドを増やし、東鷹栖の農作物の新しい美味しさを広めてほしいです。

東鷹栖農村活性化センター「野土花」

協議会のグループが共同で利用する食品加工室

ＪＡたいせつ農産物直売所に並ぶ野土花の商品

レシピ集を発行し商品の活用方法を提案している

高柳　広幹（たかやなぎ　ひろき）さん

1975年　北海土地改良区　工務課勤務
1999年　北海土地改良区　空知中央地区地域用水対策協議会　事務局担当
2005年　北海土地改良区　水土里ネット推進室勤務
2006年　北海道ふるさと・水と土指導員

岩見沢市　高柳　広幹　さん

【全国一広い土地改良区での地域活動】

北海土地改良区に勤務して、農業用水施設の維持管理や農地基盤整備事業（ハード事業）を担当していましたが、平成十年度に当区が地域用水機能増進事業を取り組んだことから、平成十一年度からソフト事業を担当することとなりました。

ソフト事業では、農業用水利施設の重要性と農業農村地域の多面的機能の役割を農業者は勿論、幅広く一般の人たちに認識していただくことが目的でした。

ハード事業しか知らない私が、いきなりソフト事業を担当することになり、最初はかなり困惑しました。

用水路周辺や農村環境の景観保全・向上を目的に各地域の人たちと一緒にどう活動するか？

国（北海道開発局札幌開発建設部岩見沢農業事務所）、北海道空知総合振興局（当時は空知支庁）と学識経験者（専修短大教授、コンサル）等で研究会を設立してソフト活動推進に向けて協議を重ねました。

当区には農業専用としては日本一長い「北海幹線用水路」が赤平市から南幌町まで約八十キロメートル流下しており、北海幹線を中心として関係市町で、様々な地域活動が始まりました。

北海幹線用水路は、平成十六年に北海道遺産に認定され、平成十八年には疏水百選にも選定されました。

これを契機に、北海幹線の認知度を上げることと農業農村地域の魅力を知ってもらうことを目的に、平成十八年度から美唄市で「北海幹線用水路ウォーキング」を実施しており、今年で十一回目を迎えます。

また、同年より北海道電力（株）からサクラ苗木の提供を受け、毎年秋には、北海幹線用水路敷地内に植樹を実施しています。

【市町村ごとの地域活動紹介】

○赤平市～アジサイの植栽とサクラ植樹、田んぼの体験学習

アジサイ交流会

北海幹線用水路沿いの景観をもっと良くしようと、地元や市と相談し、平成十四年度からアジサイの植栽を始めました。

地域の子供たちも参加した植樹は十年間続き、約二キロメートルのアジサイロードとなりました。

平成十九年度からは、地元ライオンズクラブからサクラ苗木の提供を受け、植樹を行っています。

植栽二年後には「アジサイロードの会」が設立され、遺産看板や四阿を設置し、平成十六年からは毎年七月末に納涼パーティが開催され、地域の楽しみな行事となりました。

平成二十三年度からは北海幹線横に田んぼを造成し、市内小学生を対象に学習体験を始めました。

○砂川市～農業用水施設見学会と植樹活動

平成二十年度から、地元のＮＰＯ法人オアシスと協力し、市内小学生を対象に毎年、農業用水施設見学会を実施しています。

平成二十二年度からは、北光地域で北海幹線用水路沿いに、実のなる樹木を植樹しています。

将来的には、地域の子供たちにブルーベリーやハスカップなどを自由に摘み取って食べてもらえるような、地域の憩いの場として活用したいという地域の意向で実施しています。

○奈井江町～奈井江グリーン少年団、地元ＮＰＯ、支線組合とのハーブ植栽

用水路沿いに植えたハーブ

平成十五年度より、景観増進と害虫防除を目的に用水路沿いにタイムというハーブを植栽しています。

ハーブを植えることにより、減農薬米に寄与しています。

○美唄市～中村地域でのワークショップと峰延中学生とのハーブ植栽

中村地域では、平成十三年度より地域活性化のためのワークショップを始めました。

私は初めてのワークショップの為、最初はあまり理解していませんでしたが、地元の要望を実現するため、毎週のように中村地域に出向きました。

ワークショップでは、菱沼でボートやカヌーに乗って遊びたいという意見が多かったため、自分たちでカヌーを作ることになり、当時の空知支庁耕地課長の指導をいただきながら数か月かかってカヌーを四艇作りました。

完成してからは、毎年夏に一度、地元の人たちや関係者でカヌーを楽しんでいます。

平成十七年度からは、峰延中学生たちとのブルーキャットミントというハーブを北海幹線用水路沿いに植栽しています。

草取り作業も行い、四～五年はきれいに咲いていましたが、年々雑草が繁茂してしまい、現在は残念ながらほとんど消えてしまいました。

菱沼でのカヌー遊び

○三笠市～植樹活動

平成二十一～二十二年度に、美園小学校や萱野中学校、町内会と一緒にサクラを植樹しました。

用水路沿いに植えたサクラ

○岩見沢市～岩見沢農業高校への教育支援

平成二十年度から、岩見沢農業高校と北海道開発局札幌開発建設部岩見沢農業事務所、北海土地改良区の三者で教育支援パートナーシップ協定を締結しました。

農業土木工学科一～三年生を対象にした出前授業を行い、農業用水施設や農業農村整備事業の現地見学会を行っています。

生徒には現地見学会が好評で、一日かけて当区施設を見てもらうことが将来の就職活動に役立っているようです。

○北村～田んぼの学校

平成十四年度から、北村小学校三～六年生を対象に、農業農村の持つ自然環境や様々の機能に触れて、豊かな感性や見識、郷土を愛する心を育て上げることを目的に、「田んぼの学校」を総合学習授業で実施しています。

平成十六年度には、この取り組みが全国「田んぼの学校」企画コンテストで入賞しました。

現在もＰＴＡと関係機関が一緒に活動しており、祖父母参観日に合わせて行われる秋のもちつき集会には、三百名を超える人たちが参加し、村の行事として定着しています。

秋のもちつき集会

それぞれの地域には特徴があり、子供たちや一般の人たちとの交流も増え活動がとても広がりました。

新聞や雑誌にも数多く掲載され、土地改良区の新しい役割が少しずつですが定着していていると思っています。

今後も、農業用水施設の役割と必要性とともに、農業農村地域の魅力を広めていきたいと思います。

【全国研修を受講して】

今年二月に東京で開催された全国研修会に出席しました。

特別講演の山崎亮氏は、百以上の全国地域づくりワークショップに参加され、人がつながる仕組みをデザインする“コミニティデザイン”の話を中心に、一時間半ほど、お話していただき、あっという間に時間が過ぎた気がしました。

プレゼンテーションでは数ある事例から、ふる・水研修会参加者が興味ありそうな地域の事例を紹介していただき、特に島根県隠岐郡海士町（あまちょう）の、養殖岩牡蠣を「海士のいわがき春香」と命名してブランド化した事例はとても面白く参考になりました。

山崎氏の提案はいくつかありました。

・活動人口を増やすこと→楽しく面白く、地域を良くする人を増やすことが大切

・少人数でも、より良いことをする人をつくることを目標に

・人の真似をするのではなく、徹底的に多くの事例を集めて、打合せをして、良い判断を行う

・伸びそうなアイディアを選び抜く力をつけ、地域の特徴を生かしいく

・ワークショップはすぐ実行するのでなく、プロセス（進める手順）が大切で、地域の中に入り込み話し合うこと

また、北海道から、農業女子ネットワークはらぺ娘（はらぺこ）の代表である安丸千加氏から“We are hungry!!「もっと!」を目指す女性に”と題して講演がありました。

現状に満足していない若い就農女性たちの現状不満解消を目的に設立された団体「はらぺ娘」は、仲間づくりと若い女性たちの横のつながり、新しい仲間づくりも目的に活動しており、農業女性のパートナー不足から、婚活活動をし、仲間の悩み相談（娘が農家を継ぐ事）などを行っている等の活動紹介がありました。

安丸氏からは、次のような提案がありました。

・若者は、多くの研修会や講習会に出てもっと研鑽してほしい

・外部からの視点を大切にして、自分たちの当り前が本当かどうか考えてほしい

・若い人たちが農業に希望を持って続けて行けるにはどうしたら良いかを考えられる若者になってほしい

研修会には、全国から約百五十人が参加し、その他に三名の講師からご講演をいただきました。

また、五県から活動事例発表がありました。

平成27年度全国研修受講メンバー
前方右がレポートの寄稿をいただいた高柳アドバイザー

BOOKS

東川スタイル―人口8000人のまちが共創する未来の価値基準（まちづくりトラベルガイド）

編著者：玉村 雅敏・小島 敏明　発行：産学社

人口減少時代を迎えるなか、定住者が過去20年で約14%増加している人口8000人のまち、東川町。本書では、ランチしか営業しないお店、子どもが居ることが当たり前な職場など、ライフスタイルに合わせた無理のない働き方や仕事の質へのこだわり、丁寧な暮らし方など、「東川らしさ」を追求するライフスタイルと、その背景にあるまちづくりの取り組みを解説する。

表紙紹介

北海幹線用水路は、日本最長の農業用水路であり、「北海道遺産」、「全国疏水百選」にも選ばれています。

この北海幹線用水路沿いに歩く「北海幹線用水路ウォーキング」は、毎年、三百人近い参加者が美しい田園風景を眺めながら、十キロ、七キロ、三キロの三コースを歩きます。

新鮮野菜が当たる大抽選会や、農産物販売などもあり、ウォーキング以外にも参加者が楽しめる工夫が凝らされています。

十一回目となる今年は、七月三十一日に開催しますので、初夏の北海道をウォーキングで満喫してみませんか。

お問い合わせは、北海土地改良区（0126-22-2400）へ。